

病院における壁面アート提案とデザイン教育の 実践の一例

合田喜賢^{*1} 中村俊介^{*1} 森絵美^{*1} 真鍋克己^{*1} 平野聖^{*1}

要 約

本稿では、川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科ホスピタルデザインコースが2017年秋学期の授業「医療福祉デザイン演習Ⅰ」において実施した病院における壁面アートの制作の事例を報告した。実施後の学生アンケートにより、デザイン教育の実践において当初課題とした、1) デザイン提案、2) スケジュール管理、3) 病院スタッフとのコミュニケーションを取ること、は概ね達成できたと思われる。また、今後の課題は職員への柔軟な対応、作業の効率化、作業後の処理である。

1. はじめに

本稿では、川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療福祉デザイン学科のホスピタルデザインコースの関わった医療現場におけるデザイン実践活動の事例を紹介し、学生への教育効果について報告する。これまでに筆者らが発表した一連の研究報告¹⁻³⁾のなかに位置付けることができ、今後の研究・教育活動の一助とするものである。

デザイン実践活動は、2017年度秋学期の「医療福祉デザイン演習Ⅰ」において行なった。ホスピタルデザインコースでは、実践的な授業を通してデザインスキル、特に病院に所属するデザイン専門職の育成を大きな目的のひとつとしている。今回の実践活動においては、1) デザイン提案、2) スケジュール管理、だけでなく、3) 病院スタッフとのコミュニケーションを取ること、以上3点を主要な課題とした。

今回の実践活動は、岡山旭東病院の依頼による。活動の内容は、同院における非常階段の壁面アート制作である。何もなかった非常階段において、利用者・病院スタッフにとって明るい気持ちになってもらえるような空間づくりを目指した。同院では、デザイン導入を積極的に進めている。また、院内には企画広報室を有しており専任のデザイン専門スタッフが所属している。このことから、デザイン実践活動の、そして、学生の教育の場として極めて有意義であると考ええる。

以上を踏まえ本稿では、岡山旭東病院において実施した壁面アート制作の提案、施工の様子、運営について紹介する。また、活動終了後の学生へのアンケート結果を示し、デザインの実践活動を通して得られた教育効果とこれからの課題をみる。

2. デザイン実践活動の内容について

2.1 概要

デザイン実践活動の場となったのは、岡山旭東病院（岡山県、1983年開院、202床）である。参加学生は、川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科2年生9名（当時）である。活動期間は、2017年10月から2月までの5か月であった。活動は、授業「医療福祉デザイン演習Ⅰ」において実施した。表1に壁面アート制作のスケジュールを示す。

2.2 活動に至る経緯

岡山旭東病院から壁面アート制作の依頼があった。病院側からは、非常階段、渡り廊下、建物の外壁などいくつか候補が挙げられた。

今回の実践活動は2年生が主体であった。2年次の学生にとっては、このときがはじめて医療施設におけるデザイン提案を実施する機会となる。また、建物の外壁の装飾には専用の塗料を使用しなければならないため、技術的に困難であることが想定された。これらを踏まえ、施工が比較的容易で学生への負担も比較的少ない屋内の非常階段の壁面が実施対象と

^{*1} 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科
(連絡先) 合田喜賢 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail : goda.y@mw.kawasaki-m.ac.jp

なった。

表1 壁面アート制作のスケジュール
川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科作成

10月	(1) 課題内容発表、事前調査 (HP等)
11月	(2) 現地見学・検討
	(3) 現地調査のまとめ・ディスカッション
	(4) アイデアのラフスケッチ案提出・ディスカッション
	(5) アイデアの絞り込み (5案)
	(6) アイデアのブラッシュアップ、企画書の作成
12月	(7) 企画書のチェック・ブラッシュアップ
	(8) 企画書の提出
	(9) 現地プレゼンテーション
1月	(10) 企画内容決定
	(11) 修正案の提出
2月	(12) 材料発注・施工準備・当日進行管理
	(13) 実施

2.3 現地調査

2017年10月には、学生および教員が病院を訪れ、現地調査を行なった (図1)。現地調査は、壁面アートの使用用途や利用者・職員にどのような効果を与えるかといった目的を検討しつつ進めるほか、デザインのモチーフの手がかりとして、病院の第一印象や病院側の要望、病院全体の雰囲気の確認を行った。病院長や企画広報室のスタッフと直接意見交換できる場を設け、病院側の要望を把握することにつとめた。また、現場では、施工用素材の候補 (カッティングシート、塗料) を貼付、塗布することで、壁面に適した素材であるか実験を行なった。

2.4 現状把握と企画提案

調査後は、まず大学において参加学生各自が1案ずつ提案を行い、その後、類似の提案をまとめて5案に絞った。企画案は、院内のアクアリウムから発想を得た A 案「魚のいる小窓・波」、殺風景な空間

に色どりを与える B 案「風船」、院内での BGM から着想を得た C 案「音符の木と花のイラスト」、病院長の言葉 (「アートではなく、ハートだ」) からイメージを膨らませた D 案「ハートの木と花のイラスト」、院内でも使用されているステンドグラスを応用した E 案「ステンドグラス風アートと花のイラスト」の5案であり、いずれも現地調査を踏まえて学生が考えた案である。以上の提案に、どの案にも応用が可能となる「メッセージカードを使用」という提案を加えて、合計6案を企画書にまとめ、2017年12月、病院側に送付した。

企画書送付の1週間後、病院長、事務部長をはじめとする病院スタッフの立会いのもと学生によるプレゼンテーションを実施した (図2)。当日は実物大の壁面のイラストやサンプルを持参して、プレゼンテーション後に現地において掲示するなどシミュレーションを行った。

2.5 企画書の修正と病院への提案

プレゼンテーションの日から1週間、病院側から採用案が提示された。その結果、D 案「ハートの木と花のイラスト」を実施することに決定した。これを受けて企画書を修正し、2018年1月、再提案を提出した。

再提案は、病院側からの意見を踏まえマスコットキャラクターの使用や、ロゴマークに使用されているハートをモチーフとしたマグネットシートを作成し、非常階段の扉にはカッティングシートでハートの木を作成し、踊り場に花のイラストを描くというものである (図3)。また、修正案には作業工程も提案した。施行当日に病院スタッフと学生で完成させることでコミュニケーションを取るという方法を採用するため、ハート型のカッティングシートの切り抜きを病院側に依頼した。



図1 現地調査の様子

川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科撮影



図2 プレゼンテーションの様子

川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科撮影

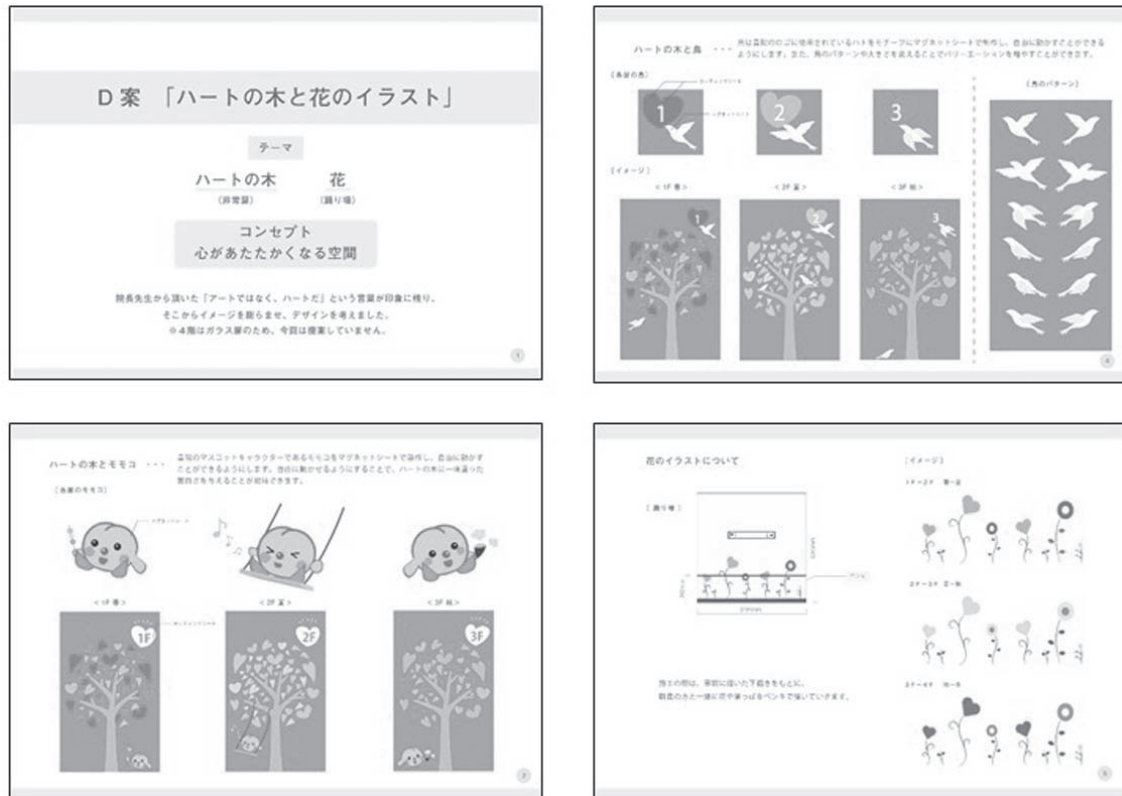


図3 修正後の提案（一部）
学生作成

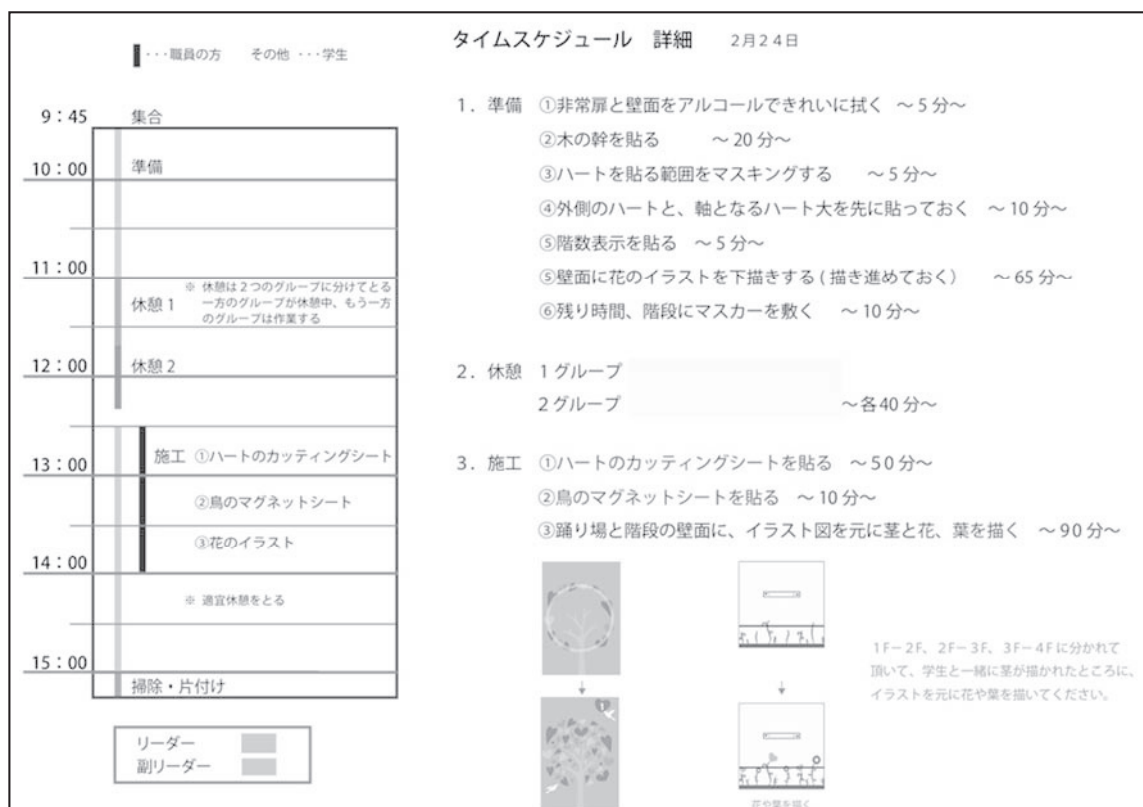


図4 施行当日のスケジュール
学生作成に加筆



図5 当日の様子1（非常扉のカッティングシートの貼付）

川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科撮影



図6 当日の様子2（踊り場のイラスト）

川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科撮影



図7 当日の様子3（病院スタッフの参加）

川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科撮影



図8 完成した壁面アート

川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科撮影

2.6 施工

2018年2月、壁面アートの施工を行った。

施工のスケジュールは、午前と午後の2部構成とした（図4）。午前の部は学生の作業時間として割り当てた。9名の学生が参加し、1階から3階までの非常扉に学生2名ずつ配置し、残りの学生は壁面のイラストを担当した。非常扉では、木の幹型のカッティングシートの貼付、ハートを貼付する範囲のマスキング作業を行った（図5）。壁面のイラストでは、イラストの位置決め、マスキングテープを廊下に貼ることでペンキによる汚れを防止をした後、絵を描く作業に取り掛かった（図6）。午後の部は、病院スタッフに参加してもらう時間を設定した。病院スタッフには指定した時間内（1時間半程度）に、前もって切り抜きを依頼していたハート型のカッティングシートを貼付してもらった（図7）。病院スタッフも積極的に参加していただくことができただけでなく、現場でカッティングシートを自由に切り抜き、

オリジナルのハートを作成して貼付するという想定外の展開をみせつつ完成を迎えた（図8）。

3. 学生アンケートにみる教育成果

3.1 学生アンケートの実施について

実施終了後、参加学生9名にアンケートを実施した。アンケートは、記名式で、壁面アートを体験して「良かった点」と「課題点・反省点」について感想を記入させた。その結果をまとめたものが表2である。複数もしくは類似の回答があったものについては、それぞれ表中に下線を施した。

3.2 アンケート結果と考察

3.2.1 成果

「良かった点」は3つ挙げられる。

1つ目は、時間内に作業が終了した（学生2・6・7・8・9）、スムーズに作業ができた（学生3・5・8）と述べるように、当日はスケジュール通りに作業が進行したことである。2つ目は、職員の方と交流でき

表2 学生へのアンケート結果
川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科作成

学生	良かった点	課題点・反省点
1	<ul style="list-style-type: none"> ・ホスピタルデザインの活動を味わえたこと。 ・職員の方と、<u>交流</u>できたこと。 ・職員の方や、患者さんに<u>喜んで</u>もらえた事。 ・暗い雰囲気漂う空間を、居て楽しい空間にできたことを、この活動を通して職員の方の<u>喜び</u>の声が直に聞くことができ、アートプロジェクトで何かが変わったことが目に見えて分かり、実感できました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お手伝いで来たので職員の方の対応がうまく<u>臨機応変</u>に出来なかったこと。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>時間内</u>に完成した ・想像以上に良いものができた ・<u>職員の方に楽しんで</u>もらえた ・リハビリの患者さんにも参加してもらえた ・自分も楽しめた 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備の時、リーダーとしてメンバーを動かせなかった（上手く指示できなかった）
3	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の順序をあらかじめ決めていたため<u>スムーズに作業</u>ができました。 ・<u>職員さんがたのしみながら</u>作業ができたと感じました。 ・利用者さん、職員さんに挨拶ができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・連携やその場での<u>臨機応変</u>な対応ができない人がいた。 ・作業場所の関係で<u>作業できない</u>人もいたのでみんなが作業を同時にできればよかった。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・ホスピタルデザインの活動に参加できたこと。 ・職員の方や、患者さんに喜んでもらえたこと。 ・<u>職員の方が進んで</u>ハートや、その他貼るものをアレンジしたりして、<u>楽しんで</u>もらえたこと。 ・実際に活動に参加してみて、直に職員さんや患者さんの<u>生の感想</u>が聞けて新鮮だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題点は、壁にペイントをする際、一面一面の作業になってしまったので、次回からは先に全て下書きを積和らせるなどした方が、より早く作業が終わるのではないかと思った。 ・<u>ペンキ</u>を混ぜる際に、筆で混ぜてしまうと筆の持ち手も汚れるし手も汚れてしまったので、割り箸などが必要だと思った。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・職員さん、患者さんと、作業を通して交流が出来た事。 ・職員さんのオリジナルのハートで個性あふれるハートの木が出来たこと。 ・私たちが想定したよりも多くの有難い<u>感想</u>を生で聞けたこと。 ・入念な作業計画と下準備のおかげで<u>スムーズに作業</u>が終えられたこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道具の貸し借りで<u>階段を何度も往復</u>しなければならなかったこと。 ・狭い階段通路での作業だったこともありぶつかることがあった。 ・カットしたハートのシートを床に置いていたのではらついていて探しづらかった。
6	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>職員の方や患者さんに楽しんで</u>もらえた ・想定していた<u>時間内</u>に完成させることができた ・自分も楽しみながら取り組むことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙に描き起こしたデザイン案を、何の材料を使って実際のどのよう形にしていけるかを考え計画し準備することはとても難しいとわかった
7	<ul style="list-style-type: none"> ・予定<u>時間内</u>に終了できた。 ・<u>職員の方と</u>楽しみながら作業ができた。 ・患者さんも参加してくれた。 ・比較的効率よく動けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>職員の方と喋っている</u>際に手がとまってしまった。 ・<u>ペンキ</u>がかなり余った。
8	<ul style="list-style-type: none"> ・全員で協力し合いながら<u>時間内</u>に作業を終わらすことができた ・事前にシミュレーションを行っていたのでそれぞれが役割を把握できていて、<u>スムーズに作業</u>ができた。 ・職員の方と<u>コミュニケーション</u>をとることができた。 ・臨機応変に行動できた。 ・楽しみながら作業をすることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・片付けのことを事前にもっと考えておくべきだった。 ・作業で使用するものを<u>階数ごとに分けておいた</u>ほうがよかった。
9	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>時間内</u>に終わることができた。 ・同年代だけでなく、<u>職員の方とも連携</u>をとりながら作業ができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>使用済みの物</u>をどうするか決めておくのを忘れていた。 ・<u>ペンキ</u>を買いすぎた。 ・<u>職員の方の対応</u>ばかりになってしまい、ペンキがあまり塗れなかった。

た（学生1・5）、生の声・直の声を聞くことができた（学生1・4・5）、連携できた（学生9）と述べるように、職員とコミュニケーションが取れた（学生

8）ことである。3つ目は、職員の方に楽しんでもらえた（学生2・3・4・6）、喜んでもらえた（学生1）と述べるように、利用者への配慮ができたことであ

る。

当初主要な課題として設定していた3点、即ち、1) デザイン提案、2) スケジュール管理、だけでなく、3) 病院スタッフとのコミュニケーションを取ること、のうち、特に2) と3) について学生は十分に意識していたといえる。また、アート制作が自己完結に陥らず、利用者への配慮ができた点は、病院におけるデザインスタッフの育成の観点からも評価できるのではないかと考える。

3.2.2 課題

「課題点」は3つ挙げられる。

1つ目は、職員の対応が中心になり（学生7・9）、臨機応変な対応ができなかった（学生1・3）と述べるように、職員に対して柔軟な対応ができなかったことである。2つ目は、階段を往復する必要が生じ（学生5・8）作業できない学生がいた（学生3）と述べるように、作業効率に問題があったことである。

3つ目は、ペンキが余り（学生7・8）、片付け・使用済みのものの処理を（学生7・8）を考慮すべきと述べるように、作業後の処理まで考慮できなかったことである。

これらについては、今回がはじめての実践活動であることに鑑みても致し方ない点であり、むしろ教員側の今後の課題としたい。

4. 結び

以上、授業「医療福祉デザイン演習Ⅰ」で岡山旭東病院において実施した壁面アート制作の実践活動の事例を紹介し、その教育成果を述べた。

当初授業の課題とした、1) デザイン提案・施工、2) スケジュール管理、3) 病院スタッフとのコミュニケーションを取ること、は概ね達成できたと思われる。職員への柔軟な対応、作業効率、作業後の処理、の3点については今後の取組みに反映させたい。

謝 辞

今回の活動にあたり、岡山旭東病院院長土井章弘先生、企画広報室井上朝美氏、荻野雄大氏にはご高配を賜りました。末筆ながらお礼申し上げます。

文 献

- 1) 森絵美, 合田喜賢, 平野聖, 尾崎公彦, 真鍋克己: 病院でのイベント企画実践を通じたホスピタルデザイン教育の有効性. 川崎医療福祉学会誌, 26(1), 85-89, 2016.
- 2) 合田喜賢, 森絵美, 平野聖, 尾崎公彦, 真鍋克己, 松本正富: ホスピタルデザイン教育の実践報告—児島中央病院のイベント開催の事例を通して—. 川崎医療福祉学会誌, 27(1), 183-191, 2017.
- 3) 合田喜賢, 森絵美, 平野聖, 尾崎公彦, 真鍋克己: イベント実施からみたホスピタルデザインの実践報告. 川崎医療福祉学会誌, 28(1), 305-311, 2018.

(平成30年12月12日受理)

Report of the Suggestion of the Wall Art and Its Design Education Practice in Hospitals

Yoshikata GODA, Shunsuke NAKAMURA, Emi MORI,
Katsumi MANABE and Kiyoshi HIRANO

(Accepted Dec. 12, 2018)

Key words : hospital, wall art, design education practice

Abstract

This is a report of a case study on the wall art created in a hospital. Through the design education practice, the challenges that students could generally achieve are as follows: 1) proposing design, 2) managing the schedule, 3) communication with hospital staff. On the other hand, problems to be solved in the future are as follows: 1) flexible response to staff, 2) efficiency of work, and 3) processing after work.

Correspondence to : Yoshikata GODA

Department of Design for Medical and Health Care
Faculty of Health and Welfare Services Administration
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : goda.y@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.28, No.2, 2019 527 – 533)

